埼玉純真短期大学研究論文集第 17 号　PP.25-35

歌唱表現を促すための学習過程

Learning Process to Encourage Singing Expression

瀬戸　奏
（こども学科 助教）

要旨　保育現場における音楽活動のねらいとして，子どもたちの「表現力」を伸ばすことが上げられるが，まずは保育者こそがその力を付ける必要がある。本研究では，音楽表現の中から歌唱に焦点を当て，「詩の分析」「言葉を用いた表現方法」を通して歌唱に対する意欲の向上を目的とした。順序立てて楽曲へと取り組むことで「楽曲を通して子どもたちへ伝えたいこと」を考え，技術だけに囚われず表現をする意識を高めることができた。そして実践へと結びつけるには「他者の前で表現する場」をより多く経験することが重要であるという結果に至った。

【キーワード：音楽　弾き歌い　歌　言葉　詩】

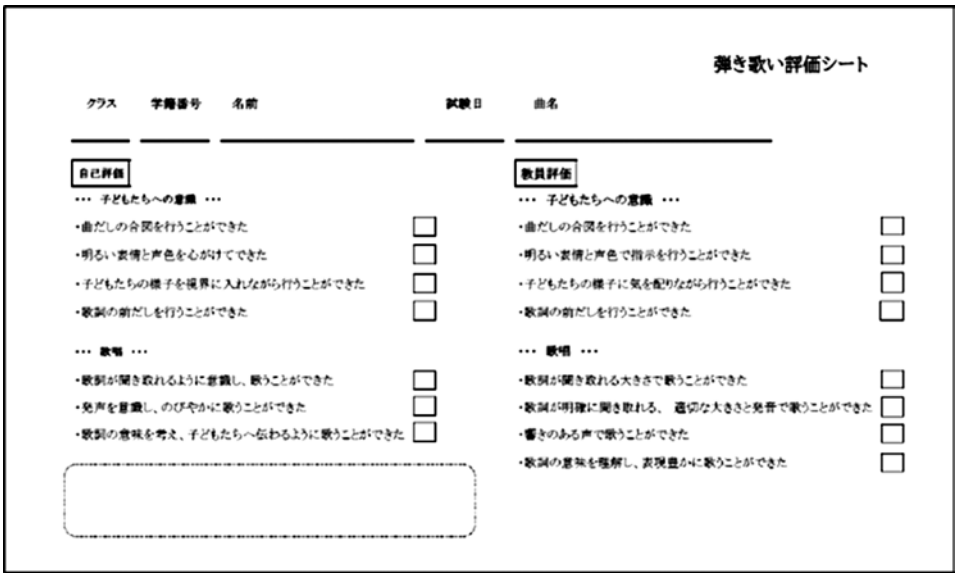
Ⅰ．はじめに

私たちの生活や社会において「歌」は様々な役割を果たしている。それは子どもたちが過ごす幼稚園や保育所などの保育現場でも同様であり，あらゆる場面で音楽を用いた活動が行われていて「歌」は欠かせない存在だ。子どもたちは歌を通して新しい言葉に出会い，友と歌う楽しさや自由に表現する喜びを味わうことができる。

保育者養成校のＳ短期大学では，音楽の基礎を学ぶために一年次は必修科目「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」を，より知識を深めていくために二年次は選択科目「音楽Ⅲ」「音楽Ⅳ」を配置している。授業方法は 90 分のうち 45 分が合同授業，45 分がマンツーマンによるピアノレッスンという 2 部構成となっており，筆者が担当しているのは合同授業である。主に季節のうたや生活のうたに関する知識を深め，弾き歌いを中心に指導している。

筆者を含めた音楽科目の担当教員は，授業計画を構成するにあたり，まずは入学時の学生状況を把握することから始めている。2021 年度～ 2023 年度入学の学生状況を振り返ると，ピアノ初心者とピアノ経験者の割合は 50％：50％であった。初心者の学生は楽譜の読み方を学び，そして指を動かすことに慣れるところから始まる。経験者の学生は実際に保育現場で使われている楽曲のレパートリーを増やしていく。保育現場にはピアノが置いてあり，音楽を用いた活動が多く行われているというイメージがある学生たちは，＜間違えずに弾けるようになりたい＞＜人前で堂々と弾けるようになりたい＞と，ピアノ演奏に対する意識が高い。

（図 1）弾き歌い評価シート


弾き歌い評価シート

クラス　学籍番号　名前　試験日　曲名

自己評価

・・・ 子どもたちへの意識 ・・・

- 曲だしの合図を行うことができた ☐
- 明るい表情と声色を心がけてできた ☐
- 子どもたちの様子を視界に入れながら行うことができた ☐
- 歌詞の前だしを行うことができた ☐

・・・ 歌唱 ・・・

- 歌詞が聞き取れるように意識し、歌うことができた ☐
- 発声を意識し、のびやかに歌うことができた ☐
- 歌詞の意味を考え、子どもたちへ伝わるように歌うことができた ☐

教員評価

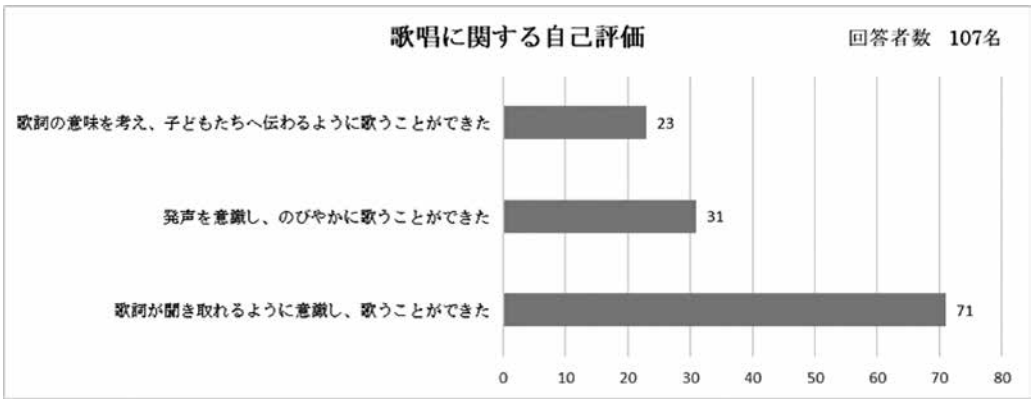
・・・ 子どもたちへの意識 ・・・

- 曲だしの合図を行うことができた ☐
- 明るい表情と声色で指示を行うことができた ☐
- 子どもたちの様子に気を配りながら行うことができた ☐
- 歌詞の前だしを行うことができた ☐

・・・ 歌唱 ・・・

- 歌詞が聞き取れる大きさで歌うことができた ☐
- 歌詞が明瞭に聞き取れる、適切な大きさと発音で歌うことができた ☐
- 響きのある声で歌うことができた ☐
- 歌詞の意味を理解し、表現豊かに歌うことができた ☐

（図 2）弾き歌い評価シート―歌唱に関する自己評価の結果



また，現 2 年生の「音楽Ⅲ」履修者が実施した模擬授業についての自己評価を分析すると，子どもたちへの意識については全学生が「曲だしの合図を行う」を徹底し，4 つの項目のうち 2 ～ 4 項目を達成した。しかし，「歌う」ということに関してはどうだろうか。歌唱についての評価のみを抜き出すと「歌詞が聞き取れるように意識し，歌うことができた」71 名，「発声を意識し，のびやかに歌うことができた」31 名，「歌詞の意味を考え，子どもたちへ伝わるように歌うことができた」23 名となった。（図 2）ピアノという楽器が鳴る中で子どもたちへと聞こえるように歌うことができた学生は約 7 割いたが，表現まで到達したと感じる学生は少ないことがわかった。ピアノは自信を持って弾けるようになるまでには鍛錬を要するが，歌う・声を出すという行為は日常で誰もが行っており特別なものではないはずだ。なぜ弾き歌いの際には歌唱表現が疎かになってしまうのだろうか。

学生各々課題はあるが，共通して言えることは楽曲の背景や詩の内容を十分に理解しきれておらず表現したいことが明確になっていない，そして表現の方法が分からないのではないかと筆者は考える。表現したいことが曖昧なままだと自信が持てず，声が小さくなってしまう。これは歌うという場面だけではなく，人前に立ちプレゼンテーションをする際も同じだろう。正しい音程や発声という技術を身につけることも必要ではあるが，ただ美しい声だけで歌っても楽しい曲，悲しい曲，どんな曲も同じに聞こえてしまい退屈だ。声に感情をのせてこそそれぞれの楽曲の素晴らしさを伝えることができる。また，歌は年齢や経験によって内容の捉え方が違う点も面白く，自由に表現できるのも醍醐味の一つだ。

そこで本研究では，歌唱表現を促すための学習過程として「詩の分析」と「言葉を用いた表現方法」に取り組み，春のうた・夏のうたの実践を行った。対象は新 1 年生の「音楽Ⅰ」履修者とし，歌唱表現に対する意欲の向上を目的とする。

Ⅱ．方法

1. 対象者と調査期間

S 短期大学　学生

「音楽Ⅰ」履修者　1 年生 128 名

調査期間は 2023 年 4 月～ 8 月

2. 方法と項目

1）楽曲分析

楽譜から詩，音楽記号を中心に分析。

2）学生によるグループワークの分析

グループで話し合い詩から情景，登場人物の心の動きを思い浮かべた結果を分析。

3）弾き歌いに関するアンケート

楽曲に関して得た知識，弾き歌いを行うにあたり大切にしていること，全 15 回の授業終了後に今後より深めたいと感じた項目と目標を調査。

4）文献研究

Ⅲ．実践

歌唱表現を促す学習過程として，楽曲へは「1. 詩の分析」「2. 言葉を用いた表現方法」の順で取り組むこととする。授業では春のうた・夏のうたから多くの楽曲を扱ったが，本論文ではその中からいくつかの楽曲を例として取り上げる。取り組みの際には「詩」と「歌詞」という二つの単語

を用いるが，「詩」は「言葉そのもの」とし，「歌詞」は「言葉にメロディーが付いているもの」と定義する。

1. 詩の分析

1）詩を整理する

まず初めに，詩の中に知らない言葉や単語がないかを確認する。「いろいろな伴奏で弾ける 選曲こどものうた 100」[1] から春のうた・夏のうたを例に取り上げると，『ちょうちょう』では「飽きたら」を「あいたら」，『かわいいかくれんぼ』では「足」を「あんよ」というように表現。『こいのぼり』では「まごい」「ひごい」，『たなばたさま』では「のきば」「きんぎんすなご」「ごしき」といった現世代には馴染みの薄い言葉が見られ，同書に収録されている 46 曲のうち 4 曲に上記のような学生が日常では使う機会の少ない表現が使われている。知らない言葉や単語をそのままにして歌ってしまうと，子どもたちへ正しい楽曲の内容を伝えることも表現することも難しくなってしまう。本研究においては，筆者が詩から単語を抜き出し学生へと提示。漢字表記へ直し，意味調べを行った。（図 4）

（図 3）馴染みの薄い言葉遣いや表現が使われていた楽曲

曲名	歌詞	意味
「ちょうちょう」	あいたら	飽きたら
「こいのぼり」	まごい	真鯉：黒色の鯉
	ひごい	緋鯉：赤色の鯉
「かわいいかくれんぼ」	あんよ	足
「たなばたさま」	のきば	軒端：軒の先端
	きんぎんすなご	金銀砂子：金箔や銀箔を粉にしたもの
	ごしき	五色：青・赤・黄・白・黒（紫）

（図 4）『こいのぼり』授業プリント

『こいのぼり』　近藤宮子　作詞／えほん唱歌

毎年５月５日「こどもの日」によく歌われている曲。

■鯉のぼりの意味とは？どうしてあげるようになったの？

鯉は清流だけではなく、沼や池といった様々な環境で暮らすことができます。
そういったことから人間の子どもと鯉をなぞらえて、
「＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿」と
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿を祈願したものです。

■歌詞の意味を理解し、読んでみましょう！

やねより　たかい　こいのぼり
おおきい　まごいは　おとうさん
ちいさい　ひごいは　こどもたち
おもしろそうに　およいでる

「まごい」…とは？
漢字で書くと「＿＿＿＿＿＿」色は「＿＿＿＿」
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

「ひごい」…とは？
漢字で書くと「＿＿＿＿＿＿」色は「＿＿＿＿」
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2）詩を書き出す

日本語歌詞は，楽譜になると音符のリズムに合わせてひらがなで記されている場合がほとんどである。そのままの状態で楽譜を見ながら歌ってしまうと，見ているのは「詩」ではなく，ただの「文字」という認識となり「切るべきところでないところで切ったり，強めるべきところでないところで強めたりと，日本語として不自然な歌い方を生み出す」（大賀寛，2023）[2]とあるように，拍子や音符のリズムが優先されてしまい日本語が持つ本来の自然な流れがなくなってしまう。昨今は新しい子どものうたも増え，様々なジャンルの楽曲が保育現場でも歌われている。それらの楽曲は日本語の特徴をよく理解して作曲されたものもあれば，メロディーを優先して作曲されているものもある。そこで，楽譜から詩を書き出す作業を行う。原詩が見つかるのであれば，原詩をあたるのが一番効果的だ。作詩家が漢字で表記できる言葉を意図してひらがなにしている場合があり，漢字ではなくひらがなにすることでニュアンスが変わる。例えば「子どもをあいしている」と「子どもを愛している」だと，文字から受ける印象に違いはないだろうか。筆者の場合，ひらがな表記は優しく包み込むような愛情を，漢字表記は真っ直ぐで強い愛情を思い浮かべる。もちろん受け取り手によって言葉の感じ方はそれぞれだが，表記の違いひとつで印象が変わることもあるだろう。

原詩が見つからないのであれば，楽譜に記されている歌詞をもとに，自分の思うように書き出してみるのもよい。本研究においては，筆者が楽譜から詩を抜き出し提示することで 3）へとつなげた。（図 4）

3）詩を読む

楽譜ではなく 2）で抜き出したものを用いて，子どもたちの前であることを想定して教室の隅々まで聞こえるように詩を読む。その際には「話す」「喋る」のではなく，延長線上に歌があることを前提として物語を「語る」ように意識をするよう学生へと伝えた。「日本語唱法において大切なのは詩を朗唱し，歌詞から滲み出る自然な日本語の表情と流れをつかむこと」（大賀寛，2023）[2]とあるように，いきなり音を付けるのではなく，まずは詩を何度も声に出して朗唱することで言葉の自然なリズムを感じ，自分なりに表現したいことのイメージを具体的に思い浮かべる必要がある。

4）詩から情景や登場人物の心の動きを探る

詩をもとに情景や登場人物の心の動きを探る。ここでは例として，作詞 鶴見正夫・作曲 湯山昭『あめふりくまのこ』を取り上げる。6 月のうたとして発表されたこの楽曲は，愛らしいくまのこが雨の日を楽しむ様子が 5 番まで描かれており，ひとつの物語を読んでいるような気分になる美しい曲である。授業において，プリントを用いて筆者から学生に対し「情景」と「くまのこの心の動き」に関して質問を投げかけた。各々が自由な発想で詩から答えを導き出し，グループワークを通してクラス全体へと発表した。

（図 5）『あめふりくまのこ』授業プリント

『あめふり　くまのこ』　鶴見正夫　作詞／湯山昭　作曲

■主人公のくまのこになった気持ちで考えてみましょう！

1. おやまにあめがふりました あとからあとからふってきて ちょろちょろおがわができました	物語のはじまり、はじまり。雨の日が多い季節。 どんな雨が降ってきたかな？ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
2. いたずらくまのこかけてきて そうーっとのぞいてみてました さかながいるかとみてました	くまのこのはどんな性格？　＿＿＿＿＿＿ どうしてそっとのぞいたのかな？ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3. なんにもいないとくまのこは *おみずをひとくちのみました* *おててですくってのみました*	魚がいなくてどんな気持ち？ _____ どうしてお水を飲んだのかな？ _____
4. それでもどこかにいるようで *もいちどのぞいてみてました* *さかなをまちまちみてました*	でもでも、やっぱり魚がいるような気がした。 どんな気持ちでのぞいてみたのかな？ _____
5. なかなかやまないあめでした *かさでもかぶっていましょうと* *あたまにはっぱをのせました*	物語の終わり。葉っぱを傘代わりに。 このあとくまのこはどうしたのかな？ _____ _____ _____

（図 6）『あめふりくまのこ』グループワークの集計結果

	質問	学生の発表
1番	どんな雨が降ってきたかな？	小雨・パラパラ・しとしと・ポツポツ 強い雨・ザーザー・土砂降り 向かってくる雨・風のない雨・弱い雨から強い雨へ
2番	くまのこはどんな性格？	いたずらっこ・元気・やんちゃ・好奇心旺盛・無邪気
	どうしてそっとのぞいたのかな？	魚が逃げないように・魚がつかまえたいから・魚を驚かせようと思ったから
3番	魚がいなくてどんな気持ち？	悲しい・残念・がっかり・つまらない
	どうしてお水を飲んだのかな？	喉が渇いたから・お腹が空いたから・水の味が気になった 魚が見えると思って飲み干そうとしたから・綺麗な水だと思ったから 魚の代わり・疲れたから・しょうがないなと思ったから
4番	どんな気持ちでのぞいてみたのかな？	わくわく・魚がいると信じて・やっぱり探すことにしたから 魚がいるような気がしたから・どうしても食べたいから
5番	このあとくまのこはどうしたのかな？	待ち続けた・そのまま見ていた・違うところへ魚を探しに行った 雨がやむのを待った・遊び続けた・帰った・泣きながら帰った かぶった葉に雨の雫が落ちた音に気がいった・空を見た

1 番　どんな雨が降ってきたかな？

物語の始まりであり，景色や場面設定がなされるのが 1 番である。「ちょろちょろおがわができました」という詩からのイメージや，くまのこが遊びに出かけられるくらいの雨であったのだろうという考えから＜パラパラ＞＜しとしと＞＜ポツポツ＞などの少量の雨と感じた学生もいれば，川ができるほどの雨ということは＜ザーザー＞などの強い雨に感じた学生もいた。雨の降り方ひとつで場面の様子は大きく変化し，表現する際には少量の雨であったら優しく歌い，強い雨であったらしっかりとした音で歌うであろう。

2 番 -1　くまのこはどんな性格？

「いたずらくまのこかけてきて」という詩から読み取り，＜いたずらっこ＞＜元気＞＜やんちゃ＞＜好奇心旺盛＞＜無邪気＞なくまのこを思い浮かべているようだ。

2 番 -2　どうしてそっとのぞいたのかな？

＜魚が逃げないように＞＜魚がつかまえたいから＞と静かにそっと覗き込んだと感じた学生もいた中，＜魚を驚かせようと思ったから＞というように子ども同士が遊んでいるようなわくわくとした楽しい答えもあった。

3 番 -1　魚がいなくてどんな気持ち？

「なんにもいないとくまのこは」という詩からわかるように，魚に出会えなかったくまのこは＜

悲しい＞＜残念＞＜がっかり＞＜つまらない＞と落胆している様子を思い浮かべた学生ばかりであった。

3 番 -2　どうしてお水を飲んだのかな？

＜たくさん遊んだあとで喉が渇いたから＞が多い中，＜魚が見えると思って飲み干した＞や＜魚の代わり＞と答えた者がいた。＜くまのこは魚を食べるために来たのだろう＞という，自然界の原理でいう熊が魚を捕食する様子を思い浮かべたようであった。＜くまのこと魚はお友達＞や＜くまのこは可愛らしい魚を見つけに行く＞というイメージの者が多かった中で，くまのこと魚の関係性にも様々な捉え方があることがわかりとても面白い。

4 番　どんな気持ちでのぞいてみたのかな？

「それでもどこかにいるようで」という詩から読み取り，再び魚に出会えることを期待して＜わくわく＞＜魚がいると信じて＞＜やっぱり探すことにしたから＞＜魚がいるような気がしたから＞という意見が多く，3 番 -2 で魚は食べ物であると考えた学生は，＜どうしても食べたいから＞のぞいてみたのだろうという行動の理由を語った。

5 番　このあとくまのこはどうしたのかな？

5 番の最後「あたまにはっぱをのせました」は，雨の中で濡れないように葉を傘代わりにしているくまのこの様子である。楽曲はここで終わっているため魚に出会えなかったくまのこがその後どうしたのかという結末は描かれていない。続きを自由に考えてみると答えは様々で，くまのこは＜魚を待ち続けた＞という学生がいれば，＜泣きながら帰った＞や，抒情的に雨の雫や空に関して触れている学生もいた。楽曲の最後のフレーズをどのように歌うかは，このそれぞれのイメージによって異なる。『あめふりくまのこ』のように，歌い手側や受け取り側に物語の続きを想像させるような終わり方である楽曲は，解釈と表現に自由な幅がある。実際の保育現場では子どもたちと共に，続きを考えてみるのもよい。

実際に保育現場に出た際に様々な楽曲を準備するには上記のように多くの時間を割くのは難しい。しかし，有節歌曲形式のように旋律は同じものが繰り返し用いられていても場面は移り変わっていく。情景や登場人物の心の動きから，例えば明るく元気に歌いたいのか，優しく歌いたいのか，悲しげに歌いたいのか，などの表現したいことのイメージを詩から考える作業は欠かせない。

2. 言葉を用いた表現方法

1）日本語の発音方法

表現の妨げとならないよう，日本語が美しく発音できるようにいくつかのポイントに絞って注意を払う。ここでは例に，作詞 筒井敬介・作曲 村上太朗『とけいのうた』を取り上げる。

・母音と子音

日本語は母音と子音で作られている。詩をローマ字にして書き出すとわかりやすく，1 番「こどものはりと　おとなのはりと」をローマ字にすると「o to na no ha ri to ko do mo no ha ri to」になる。「a，i，u，e，o」が母音であり，その他のローマ字が子音だ。レガートに歌うには母音が切れずに発音することを意識し，詩の中に特にしっかりと伝えたい言葉や単語がある場合は子音を立てて歌う。

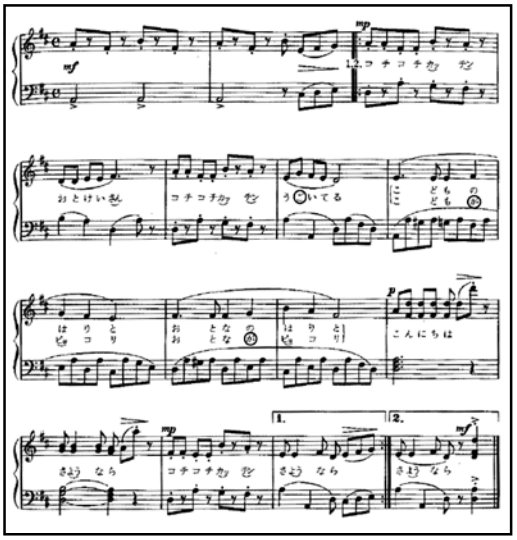
・鼻濁音

鼻濁音とは，が行の「が・ぎ・ぐ・げ・ご」を（図 7）のように発音する方法である。「豊かでふくよかな表情のある鼻濁音は日本語を表現する大切な音。鼻濁音を普通の濁音で歌ってしまうと雰囲気が変わり，抒情性が失われます。歌曲にとって鼻濁音は重要な響きです。」（大賀寛，2023）[2] と述べられているように，美しい日本語を歌うには必要不可欠だ。2 番には「こどもがピョコリ」とあるが，どの言葉を伝えたいかと考えると「こども」という主語，または「ピョコリ」という可愛らしい動詞ではないだろうか。しかし，濁音のまま歌ってしまうと「が」の方が強く聞こえてしまい，言葉の流れも妨げてしまう。アナウンサーや歌手などの言葉を扱う職業であれば別だが，日常では鼻濁音を意識して話している者は少ない。そこで，発音を習慣付けるまで楽譜の該当箇所へ印を付ける作業を行う。

（図 7）鼻濁音

が	ぎ	ぐ	げ	ご
（ん）が	（ん）ぎ	（ん）ぐ	（ん）げ	（ん）ご
(n) ga	(n) gi	(n) gu	(n) ge	(n) go

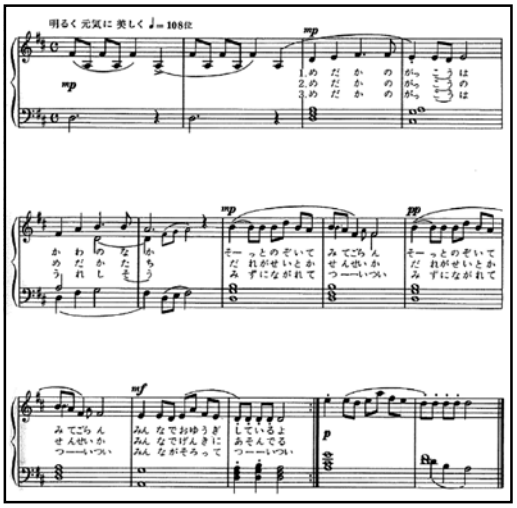
（譜例 1）『とけいのうた』



２）強弱を付ける

楽譜に記されている強弱記号を守る。ここでは例に，作詞 茶木滋・作曲 中田喜直『めだかのがっこう』を取り上げる。（譜例 2）２段目の３小節目「そーっとのぞいてみてごらん」という詩は，めだかを驚かせないように静かに覗き込む様子だ。同じ詩が２回繰り返されているが，強弱記号に注目すると１回目が mp メッゾピアノ＝少し弱く，２回目が pp ピアニッシモ＝とても弱くとなっている。どちらも静かな動作に合わせて“弱く”という指示がなされていることがわかり，１回目と２回目の繰り返し部分で変化を付けるとより情景が伝わる。その際の注意として，強弱記号通り“弱くする”だけでは言葉がはっきりと聞き取れなくなる場合があるため，その際は 1）で述べたように子音を立てて発音する。“弱く”ではなく“より大切に扱う”という意識を持つとよい。

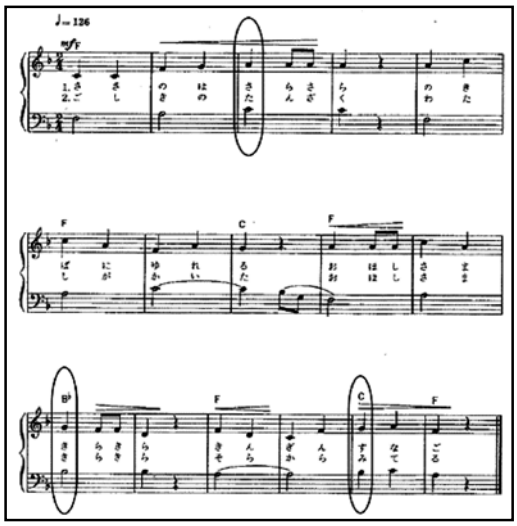
（譜例 2）『めだかのがっこう』



他にも，作詞 権藤はなよ・補詞 林柳波・作曲 下総皖一『たなばたさま』（譜例 3）ではクレッシェンド＝だんだん強く，デクレッシェンド＝だんだん弱くが用いられている。詩の中で要となっている単語，且つ強拍に音楽の盛り上がりが来るようになっている。

もし楽譜に強弱の指示が特にない場合は，指示がある楽曲と同じように詩の中からより大切に扱いたい単語を探す。その単語へとエネルギーが向かっていくように，そして音楽が停滞せずに進むように意識する。

（譜例 3）『たなばたさま』



Ⅳ．結果と考察

1）「音楽Ⅰ」履修者の歌唱表現に対する意欲の変化と今後の課題

春のうた４曲・夏のうた３曲を「1．詩の分析」「2．言葉を用いた表現方法」の順で取り組んだのち，弾き歌いに関するアンケート調査を実施。

（図 8）弾き歌いに関するアンケート

弾き歌いに関するアンケート

…音楽Ⅰの授業を終えて…

問 1.　音楽Ⅰにおいては、春・夏の楽曲を取り上げました。
楽曲の背景や詩の意味について、初めて知った楽曲はありましたか。（複数回答可）

「こいのぼり」・「あめふりくまのこ」・「とけいのうた」・「めだかのがっこう」
「たなばたさま」・「とんぼのめがね」・「しゃぼんだま」

問 2.　弾き歌いを行うにあたって、現在自身が大切にしていることを教えてください。

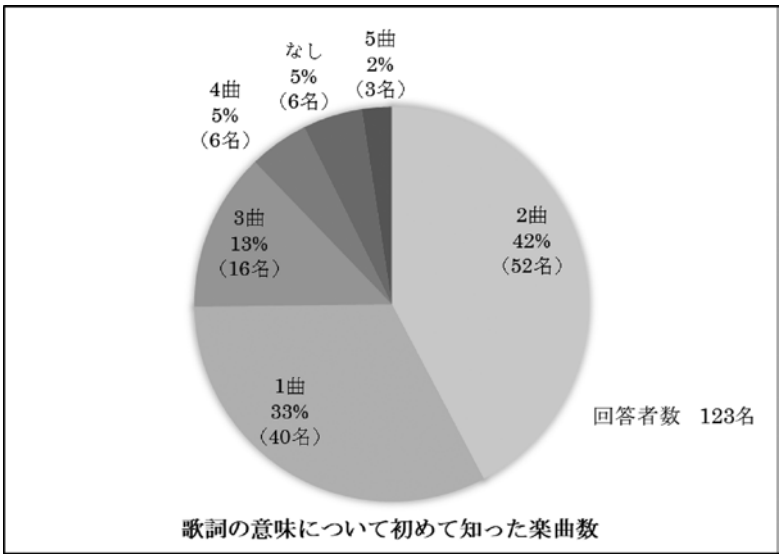
問 3.　後期科目の音楽Ⅱにおいて、目標や頑張りたいことを教えてください。

問 4.　今後より深めていきたい項目に〇を付けましょう。（複数回答可）

作曲者について・作曲された背景について・歌詞の意味と解釈
楽曲に関する豆知識・正しい音程の取り方・言葉の発音・発声法・呼吸法

ありがとうございました。

（図 9）弾き歌いに関するアンケート―問 1 の結果



問 1.　音楽Ⅰにおいては，春・夏の楽曲を取り上げました。楽曲の背景や詩の意味について，初めて知った楽曲はありましたか。（複数回答可）

誰もが幼い頃から口ずさみ馴染みのある曲である『こいのぼり』『あめふりくまのこ』『とけいのうた』『めだかのがっこう』『たなばたさま』『とんぼのめがね』『しゃぼんだま』の計 7 曲を授業で取り上げた。その中から新たに楽曲の背景や詩の意味について学ぶことがあった楽曲が＜2 曲あった＞42%，＜1 曲あった＞33%，＜3 曲あった＞13%，＜4 曲あった＞5%，＜なし＞5%，＜5 曲あった＞2%となった。この結果から全体の95%の学生が今まで知らない言葉や単語をそのままにして歌っており，そして本研究を通して楽曲への理解を高めることができたことがわかった。

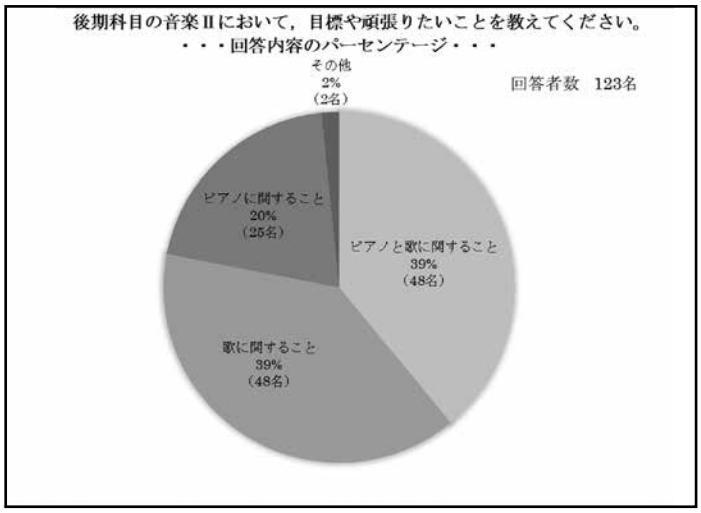
（図 10）弾き歌いに関するアンケート―問 2 の結果

問2. 弾き歌いを行うにあたって，現在自身が大切にしていることを教えてください	
表現	・ピアノだけに集中せず，気持ちを込めて歌う ・聴いている人に気持ちが伝わるよう歌う ・上手下手ではなく，子どもたちの心へ届くような歌声を意識する ・意味が伝わる歌い方を意識する ・曲の雰囲気をイメージして歌う ・気持ちを込めて歌う ・歌詞の意味を考えながら弾き歌いをする ・ピアノを弾くだけにならないよう，歌詞の意味を考えて歌にも意識を向ける ・曲の情景を思い浮かべながら感情を込めて歌う ・楽曲の背景を考える ・登場人物の気持ちを伝える ・曲の雰囲気やイメージが相手に伝わるように歌う ・表現するために強弱をしっかりとつける ・曲調に合ったテンポや声の出し方を意識する
歌唱	・声の大きさや歌い方に気を付けて弾き歌いをする ・ピアノとのバランスを考えた歌声を意識する ・子どもたちへ届く歌声を意識する ・遠くまで聞こえる，よく通る声で歌う ・大きな声で歌うが，声は張りすぎずのびやかに歌う ・正しい音程で歌う ・歌詞が聞き取りやすいように初めの言葉をしっかり歌う，大きく口を開ける ・自分が子どもたちをリードできるように歌う
ピアノ	・間違えてしまっても止まらずに弾き続ける ・メロディーラインをしっかりと出す ・テンポが速くならないようにする
その他	・まずは自分自身が楽しみながら歌う ・笑顔で演奏する ・子どもたちを見ながら演奏する ・子どもたちが歌いやすい演奏を心掛ける

問 2. 弾き歌いを行うにあたって，現在自身が大切にしていることを教えてください。（自由記述）

自由記述の内容を似通ったカテゴリーごとに分類した結果を見る。＜ピアノだけに集中せず，気持ちを込めて歌う＞＜聴いている人に気持ちが伝わるように歌う＞＜上手下手ではなく，子どもたちの心へ届くような歌声＞など，子どもたちへ伝えるということを意識し，＜歌詞の意味を考えながら弾き歌いをする＞＜登場人物の気持ちを考える＞＜曲の雰囲気やイメージが相手に伝わるように歌う＞という，楽曲への理解を深めることで表現へとつないでいく学生が多く見られた。＜声の大きさや歌い方に気を付けて弾き歌いをする＞＜ピアノとのバランスを考えた歌声を意識する＞＜正しい音程で歌う＞など，歌唱分野への意欲も高まっていることがわかった。

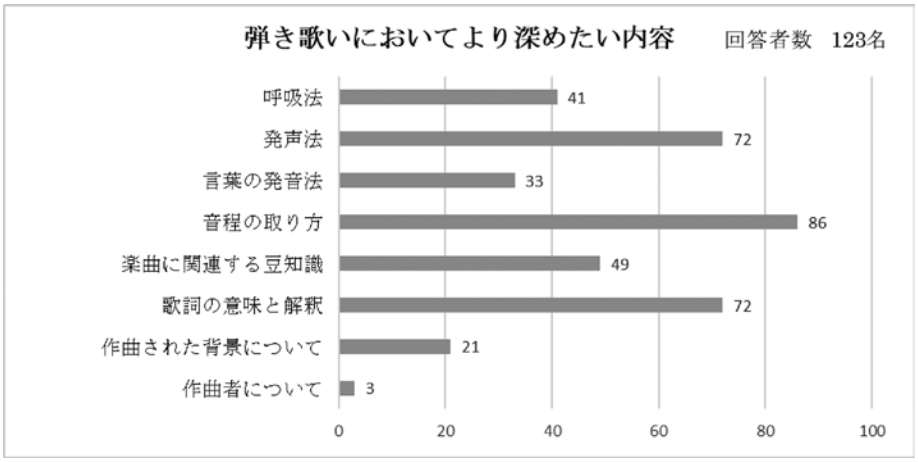
（図 11）弾き歌いに関するアンケート―問 3 の結果



問 3．後期科目の音楽Ⅱにおいて，目標や頑張りたいことを教えてください。（自由記述）

後期科目「音楽Ⅱ」では，秋のうた・冬のうた・生活のうたを学ぶ予定となっている。自由記述の内容を似通ったカテゴリーごとに分類し，全体での割合を見る。＜大きな声で歌えるようになる＞＜はっきりとした発音で歌えるようになる＞＜背景にあった音色で歌えるようになる＞など「歌に関するコメント」が 39%，＜ピアノと歌のバランスを考える＞＜弾きながら歌えるよう両立する＞など「ピアノと歌に関するコメント」が 39%，＜間違えずに弾けるようになる＞＜ピアノを楽しんで弾けるようになる＞など「ピアノに関するコメント」が 20%，「授業に対する姿勢に関することなど その他」が 2%となった。入学当初はピアノ演奏に対する意識の方が高い学生が見られたが，ピアノ演奏と歌唱の両立や，歌唱の技術もともに高めていきたいという目標を掲げる者が多く見られた。

（図 12）弾き歌いにおいてより深めたい内容―問 4 の結果



問 4．今後より深めていきたい項目に○を付けましょう。（複数回答可）

楽曲に対する知識や分析に関する項目では＜歌詞の意味と解釈＞ 72 名，＜楽曲に関する豆知識＞ 49 名，＜作曲された背景について＞ 21 名，＜作曲者について＞ 3 名となった。引き続き楽曲への取り組み方法として＜歌詞の意味と解釈＞という楽曲の内容を理解することで表現へとつなげていきたいと考える学生が多いことがわかった。

しかし，今後の課題も明るみとなった。＜音程の取り方＞ 86 名，＜発声法＞ 72 名，＜呼吸法＞ 41 名，＜言葉の発音方法＞ 33 名のように歌唱技術を深めていきたい学生が多く見られた。特に音程と発声への不安を抱えていて指導を必要としていることがわかった。

V．結論

本研究では歌唱表現を促すための学習過程を「詩の分析」と「言葉を用いた表現方法」に絞り楽曲へと取り組み，一年次「音楽Ⅰ」の履修者の歌唱表現に対する意欲の向上を目的とした。

入学当初はピアノ演奏にばかり意識がいき，歌唱が疎かになっている学生が多く見られた。もちろん演奏することも大切な課題の一つではあるが，弾き歌いに関してはピアノ演奏と歌唱の両立が必要である。本研究ではピアノ演奏の練習とは分け，歌唱に焦点を絞った。「詩の分析」をすることで楽曲が持つ本来の意味やねらいを読み取り，自身がどのように歌いたいのかを考える。そして，「言葉を用いた表現方法」を通して声にのせたことで，アンケート結果からもわかるように歌唱分野に対する意識が高まり，ただ声を出すのではなく「表現」をすることを大切にする様子が見られた。保育者は，楽曲を通して子どもたちに何を感じてほしいのかを考え発信していくことこそが「表現」である。

しかし，発声や音程の取り方という歌唱技術で悩みを抱えている学生も多く，保育現場で必要とされているのは歌手のような歌声ではないものの，自信を持って表現するためにはある程度の歌唱技術を要すことがわかった。後期科目に設置している「音楽Ⅲ」では発声とコールユーブンゲンを用いた音程の取り方を指導予定のため，技術面も伸ばしていきたい。

今後は，より保育現場を想定した実践へとつなげていきたいと考えている。そして試験や模擬授業，保育現場での実習，友の前で演奏するなどの機会を重ね，子どもたちへと意識を向けられるようにする必要がある。授業や学校生活の中でそのような機会をより多く設け，次なる課題「子どもたちの前で表現をし，共に音楽を楽しむこと」ができるように筆者も支援を続けたい。

謝辞

本研究にあたって，協力してくださった学生の皆様に心から感謝申し上げます。

参考・引用文献

1）井戸和秀 . こどものうた 100: いろいろな伴奏で弾ける 選曲 . チャイルド社，1982.
2）大賀寛．美しい日本語を歌う―心を伝える日本語唱法．カワイ出版，2003.
3）古橋富士雄．必ず役立つ 合唱の本 日本語作品編．ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス，2015.
4）永田尚子．歌唱表現における生徒の音楽的思考の発展を促す学習過程の構成．日本学校音楽教育実践学会機関誌，2004，p.173-182.